

リンゴ栽培でパキスタンの村おこし

果樹栽培が盛んな長野県上伊那郡飯島町では、リンゴ栽培の高い技術を生かして、パキスタンの村おこしを支援している。

【長野県】

上伊那郡飯島町



飯島町に実ったリンゴを確かめるアリさん、カリムさん(ムルフン村の村長)、シャフーさん(左から)。町の農家で指導を受けたほか、青森の農園や都内の青果市場なども訪れた

長野県上伊那郡飯島町

面積86.94平方キロ、人口約10,600人。江戸時代には幕府の陣屋が置かれ、信濃の国の政治上、重要な役割を果たした。自然豊かな飯島町のキャッチフレーズは「二つのアルプスの見える町」。リンゴやナシをはじめとした果樹のほか、花やきのこの栽培が盛ん。精密・電子関連の企業も多く、外国人住民の割合は5%を超える。2004年からは、飯島町における初の途上国支援として、パキスタン北部ゴジャール地方のムルフン村に対し、リンゴ栽培を通じた村おこしの協力をしている。

商品価値の高いリンゴを作りたい

パチン、パチン、というハサミの音とともに、青く小さなリンゴが次々と地面に落とされる。摘果と呼ばれるこの作業を行うのは、リンゴ農家の北原かづ子さんとパキスタンからやってきたシヤラファット・アリ・ハーン(愛称シヤフー)さんだ。ここ長野県上伊那郡飯島町では、パキスタン北部ゴジャール地方のムルフン村に対して、リンゴの品質向上を通じて村おこしを支援している。JICAの草の根技術協力事業として2004～05年まで実施された最初のプロジェクトは、ムルフン村から選ばれた農民3人を1年間受け入れ、町の3軒の農家がそれぞれマンツーマンでリンゴの栽培方法を指導した。

プロジェクトの第2ステージである今年も、以前ここで研修を受けた3人のうち2人が再来日し、1月から2月にかけては剪定と害虫防除を、5月から7月には摘花と摘果のおさらいをした。花やまだ小さな実を摘み取るこれらの技術は、大きくて質の良いリンゴを作るために欠かせない。「シヤフーちゃん、これは来年実らせる枝だから、こうして実を落としてね」。まるで息子に語りかけるような北原さんの言葉を、シヤフーさんは真剣なまなざしで聞いていた。

室長の宮沢卓美さんは、「事業にかかわる方たちの熱意に町の職員も触発されています。これによって町に多文化共生の意識が根付いてほしい」と語る。プロジェクトは来年で終了するが、人々のきずなはこれからも続いていきそうだ。

佐々木さんとアリさん。「息子が農業研修生としてアメリカに行ったことがあるので、そのお礼という気持ちでアリさんを受け入れました」(佐々木さん)



摘果を指導する北原さんとシャフーさん。「研修が終わっても私たちの縁は終わじゃないよ。今度は子どもたちを連れて来てね、と言っているんです」(北原さん)



地元の村で、近隣の村からやってきた農民にリンゴ栽培を指導するアリさん



獅子舞の練習に参加するアリさん(左から2人目)とシャフーさん。町役場の呼び掛けで、2人が家族に電話するときに使うテレホンカードが10万円分も寄せられた



ムルフン村の小学校を訪れた橋場さん

ている。

中央アルプスと南アルプスを望む飯島町と、K2を最高峰に頂くカラコルム山脈のふもとに位置するムルフン村。この2つの地域を結んだのは、人と人との縁だった。9・11のアメリカ同時多発テロを境に、それまで主に観光業で現金を得ていた農民の収入が激減したムルフン村から相談を受けていた在パキスタン日本大使館(当時)の近藤陽子さんは、友人である飯島町在住の橋場みどりさんにそのことを話した。

飯島町には、製造業で働く外国人が多い。橋場さんは仕事の傍ら、外国人住民の生活相談や日本語・外国語教室などを運営する飯島町国際協力会の会長をしている。「ムルフン村にもリンゴはあるが、手入れをしないため、その実は小さく商品価値が低い。果樹栽培が盛んな飯島町に、ぜひ協力してもらえないか」。何度も飯島町に足を運んだ近藤さんの願いを受け、国際協力が主体となつてプロジェクトがスタートした。

支援活動がふるさとを見直すきっかけに

05年夏、1年間の研修を終えてふるさとに戻った3人は、早速、飯島町で習得した技術をゴジャール地方にある35の村すべてに広めていった。「村人は、剪定や摘果をする

収穫が減るのではないかと心配しました。でも、以前は50グラムしかなかったリンゴの実が、手入れをすることによって400グラムにもなった。それを見て手入れの大切さを理解してくれました」(シヤフーさん)。栽培方法の改善に加え、販路の開拓にも取り組んでいる。リンゴ農家の佐々木登さんに指導を受けたアムジャッド・アリさんは、「以前は仲買人の言い値で売るかありませんでしたが、今では組合を作り、直接市場と価格の交渉をしています」と胸を張る。3年前、北原さんとともにムルフン村を訪ねた佐々木さんは、「現地では『なったものを採る』から『ならせて採る』に変わってきた。あとは彼ら自身で地元合ったやり方を工夫して行ってほしい」と期待を寄せる。来年はプロジェクトの総仕上げとして、町から専門家をムルフン村に派遣する予定だ。

この協力は、飯島町にも大きな「果実」をもたらしているようだ。アリさんたちが小・中学校を訪問したり交流行事に参加することで、町の人々が地元の良さを見直しているのだ。橋場さんは言う。「継承者がいないためにリンゴの木を切る農家を見るのは切なくて。プロジェクトをきっかけに若い人たちがリンゴ栽培を見直し、技術を受け継いでくれる」。一方、飯島町まちづくり推進

草の根技術協力事業 地域提案型 募集中!

草の根技術協力事業は、日本のNGO、大学、地方自治体、公益法人などの団体が、これまでに培ってきた経験や技術を生かして行う国際協力をJICAが支援し、共同で実施する事業です。現在、地方自治体(自治体とNGO、大学などとの共同事業も可)を対象とした「地域提案型」の事業を募集中。締切は9月30日(水)まで。

詳しくは [草の根 JICA](#) で [検索](#)